



第112号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2024.5.1

《第111回例会》
講演&ビデオ上映

2024. **5/26** (日) 13:30~
札幌エルプラザ4F 大研修室 AB

満洲でカティンの森事件に 注目していた男

～自著『命の嘆願書』より～



【講演】
井手 裕彦

「あの事件の傷はポーランド国民の心に深く残っているんですよ」。2017年9月、観光で訪れたワルシャワで、第2次世界大戦中、ソ連軍の捕虜になっていたポーランド軍将校ら2万人以上が虐殺された「カティンの森事件」の慰霊碑を通った時、ガイドさんからそう言われました。

でもまさか自分が昨年8月上梓した『命の嘆願書～モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って』（集広舎）で、虐殺現場から6500キロ以上離れた満洲で事件に注目していた人物を追跡するとは思ひもありませんでした。



その人物とは大戦後、モンゴルに抑留された同胞の命を守るため自らの危険も顧みずにモンゴル政府に嘆願書を提出していた日本軍部隊指揮官、小林多美男（1914～89）=左写真=でした。

小林は憲兵として対ソ諜報に当たっていた時、カティンの森で起きた虐殺の情報をつかみます。日本の降伏後に同様の暴虐が開拓団員らに起きる恐れを感じ、上官へ働きかけます。それを機に小林の運命も大きく変わり、私の長年の抑留取材でも聞いたことがなかった凄絶な抑留生活を経験することになります。

小林の生き様を紹介しながら、同じソ連の国際犯罪による悲劇であるカティンの森事件とシベリア抑留の接点を皆さんと考えたいと思っています。

(いで・ひろひこ、読売新聞
元大阪本社論説委員・編集委員)

カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留

後援 シベリア抑留体験を語る会札幌

No more silence

「無念の想い、
俺ら捕虜でねえ」



【語り部の名言とビデオ上映】
建部 奈津子

来年戦後80年を迎えます。現在シベリア抑留体験者の平均年齢は101歳になり、全国でご存命の方は推定4～5千人とされています。

第二次世界大戦終戦後に起きたシベリア抑留。体験者の多くは家族にすら、何も話さないまま他界されました。なぜ今その重く閉ざされた口が開いたのでしょうか。

厚生労働省の発表では、57万5千人がシベリアやモンゴルに抑留されたとされています。酷寒・飢餓・重労働そして思想教育の四重苦。亡くなる時に「お母さん」と叫びながら命を閉じました。戦死ではありません。生きていたら、きっと言いたいことがあったはずです。

帰国後の苦悩、いまだ帰らぬ遺骨。

体験者へ何年もかけて何度も聴き取りをした結果、初めて聴くことがあります。

テレビや新聞では報道されない事実。体験者の個人的な想い。終戦間際に召集された体験者の口から出た共通した言葉「おれら戦争をしていない。戦争に負けたんじゃないから捕虜ではない」。若くして無念に異国の地で亡くなった仲間も、きっとそう言いたいのではないだろうか。コロナ禍を経て、亡くなった仲間の代弁者として使命を果たす語り部の西野忠士氏=上写真=。DVD 上映を交えてシベリア抑留体験者98歳生き証人の声をぜひこの機会に聴いてください。



(たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌 会長)

入場無料、定員40人、予約推奨【お問合せ先】 hokkaidopolandca@gmail.com, 080-4071-0956 (安藤)